

兵庫県南部地震

雲衲が積極的にボランティア活動

活きた利他行実践

妙心寺派祥福寺 修行の延長として

一月十七日の早朝、神戸、淡路島北部を中心に激震が襲った。神戸市兵庫区の山の手にある臨済宗妙心寺派の専門道場祥福寺（河野太通師家）も大きな揺れに見舞われたが、幸い被害は比較的軽微。しかしこの日から、接心の日課も変更し、被災地における作務奉仕、避難所での温かい食べ物の炊き出し、浴室を開放する施浴など、活発な被災者救援活動が始まった。「これも日頃の僧堂修行の延長上。むしろ“動中の工夫の好期”」と語る河野師家に祥福僧堂の近況と、禅者の社会的貢献のあり方について聞いた。

炊き出し、病人介護

祥福寺は幸い人身被害も軽微（住職以下二十一人中、軽傷二人のみ）であったため、被災者救援に立ち上がったのはかなり早い。

震災直後の混乱の真っ只中にあった十八日朝には平常通り暁鐘を撞き、日天掃除も済ませ、はやくも僧堂としての機能は取り戻した。しかし伽藍被害（山門が倒れ、屋根瓦が落ち、本堂などの壁にひびが入った）の応急措置が一段落つくと、接心の日課を大幅に変え、河野師家や雲衲はさっそく、自転車で近隣の檀信徒や寺院を訪問。被災見舞いや、壊れた建物の後片づけなどの作業に当たった。

同寺は盤珪禅師を開基とする専門道場。先代山田無文師家、河野師家の下で修行した多くの会下から震災被害見舞いとして続々と支援物資が送られてきた。だが、雲衲の一汁一菜には蓄えの米、野菜でほぼ足りる。そこで届いた食糧などは近隣の被災家庭・寺院、避難所などに分配し、たいへん感謝されたという。

現在、祥福僧堂は神戸市の救援対策本部と連絡をとって、災害福祉人材センターにも登録。毎日、朝課を終えて午前八時から雲衲が六人ずつ交代で「NGO・RACK、祥福僧堂」の腕章を付けて出向、小学校など避難所で廊下や便所の掃除に従事している。「RACK」とは河野師家が主宰する「臨済アジアセンター神戸」である。

さらに避難所でぜんざいや味噌汁の炊き出しを実施しているほか、センターからの依頼に応じて一人暮らしの老人の家へ手伝いに出かけたり、身体の不自由な病人のために用事を代わって引き受けるなど、活発なボランティア活動を展開中だ。「おそらく一日平均して十二人ほどの雲衲が動いているだろう」（河野師家）という。

寺の外の活動だけではない。祥福寺も震災直後、一時、被災者遺体安置所を引き受け、京大地震研の調査団のためには書院を宿泊場所に提供した。また僧堂の開浴がある四、九の日（男性）と五、十の日（女性）には近隣住民のために施浴を実施。典座の大釜まで使って湯を沸かし、ふだん風呂を使えないで困っている人たちの要望に応えている。

祥福寺は少なくとも三月上旬まで、今と同じ態勢で雲衲によるボランティア活動を継続する方針。幸い、篤志者から米、小豆などの寄進もあって、ぜんざい、味噌汁等の炊き出しも当面続けられるようだ。

さらに河野師家はRACKの京都や大阪のメンバーにも呼びかけ、より広い範囲でボランティアを組織する計画。一方、妙心寺に置かれている妙心寺派の被災者救援対策本部（本部長＝小倉宗徳宗務総長）も祥福寺と連絡を取り合って救援活動を展開する方針で、今後、同寺を中心にボランティア活動の輪が広がってゆくことになりそう

だ。

いずれにせよ「僧堂の修行の延長上のもの」(河野師家) という見地から、震災後直ちに被災者救援活動を始めた祥福僧堂の動きは、禅門の僧侶としての非常時における菩薩道の実践という大きな課題を宗門人に提示したといえるだろう。

倒壊しシートで覆われた祥福寺の山門【写真は省略】

平素の托鉢に報恩 ともに涙を流そう

河野師家に聞く

禅門の社会的貢献 動中の工夫の好期

河野師家との一問一答は次の通り。

－老師はRACKの活動を通じ、かねて仏教者としての利他行の実践を強調してこられた。昨年、花園大学学長に就任するに際しても“自未得度先度他”の立場を学生に向けて強調している。

河野師家 東南アジアの仏教は“小乗”といわれるが、日本の仏教が観念的大乗、実践的小乗であるのに比べればずっと大乘的だ。

カンボジアの難民キャンプで黄色い衣の僧侶が托鉢をやっているのをみて驚き、憤ったことがある。しかし聞いてみると、難民たちが清僧に供養して功德を積めるよう、自分たちの一人前の食糧配給を遠慮して、托鉢をしているのだという。

日本の社会ではそういうわけにはゆかぬ。我々も被災者ではあるが、幸い被害は軽微だった。今はせめて日頃、托鉢して喜捨を頂いたお返しをさせて頂く。決して、恵まれた立場の者が弱者に施しをするのではない。お返しさせて頂くのだ。それが我々の菩薩道の行であると思う。

ともあれ、このような大災害に際して物質的支援もさることながら、直ちに精神的な対応ができる姿勢が日常的にできているか。我々も今回の震災への対応では、様々な点で学ぶところが多かった。

－宗門の対応のありかたについては不足を指摘する向きもあった。

河野 ともすれば我々禅僧は「肩あって着ずということなく、口あって喰らわずということなし」「めそめそするな、頑張れ」と精神論をやりかねない。しかし、現実には寒さに震え、飢えにせめられている人をどうするかだ。

現代の心理療法では打ちひしがれた人に「頑張れ、頑張れ」というのは逆効果だという。平時にあって単に気が緩んでいる相手に「頑張れ」と言うのとは訳が違ふ。そんな人を前にすれば、一緒になって涙を流すほかはない。

宗門の教義の勉強、坐禅修行がこういう非常時にどう役立つか。その意味で、雲水には「今は非常時で特殊な雑務をしているのだと思うな。日頃の修行の延長だと考えろ」と話している。誤解を恐れずに言えば、いい修行をさせてもらっていると思う。

それと、修行で得た境涯を社会的現実のなかで役立てるには、心理療法など科学的な素養も必要だ。大学の仏教学科のカリキュラムも検討する余地があるのではないか。

－今後、どういう援助が最も必要だろうか。

河野 一般論としては、ボランティアとして被災地に入って逆に被災者に迷惑にならないよう、自分たちに必要なものは自分たちでまかなえる“自己完結”型のボランティアがいちばん有り難い。

仏教者の課題としては、現実には被災者に通用するような精神的なケア、カウンセリングができるか、どのようにやってゆくか、だろう。

河野太通師家【写真は省略】

この人

七十七歳...新たな決意で復興へ

不眠不休で震災と闘い続ける
兵庫県神社庁長の岡田善夫氏

避難民の世話に忙殺

西宮・神明八幡宮は全壊

県下神社界の惨状に思い馳せ

神社本庁の県支部にあたる兵庫県神社庁庁長の岡田善夫宮司（七七）は、神社界の会合でズバリ本音を直言するなど、剛毅さで知られる人物だが、さすがに今回の大震災には愕然となった。

一月十七日午前五時四十六分。西宮市中須佐町にある自宅のベッドに横たわっていた。目は覚めていた。突然ゴーンという地響き。瞬間、グラグラと床が揺れ出し、ギギーと激しい音とともに家全体が大きく左右に踊った。電気が消えて、部屋は真っ暗である。

「家が潰れる！」「家が潰れる！」岡田宮司は二度絶叫し、「ベッドの下へ降りなければ」と判断して、身体が不自由な夫人を抱えて床の上に身構えた。一瞬の出来事で、それ以上の避難行動をしようにもできなかったという。幸い家は持ちこたえ、夫妻ともケガはなかった。

直後、玄関のドアを誰かが激しく叩いた。何を叫んでいるか、何をいつているのかは分からない。岡田宮司は飛んで行って玄関を開けようとしたが、こじれたのか、開かない。「生きています。大丈夫です！」ありったけの声で叫び、やっとのことで外へ出た。

そこでは全てが一変していた。近所の家の多くが全壊し、かろうじて立っている家もグラリと大きく傾いていた。暗い中、人々の叫び声が方々から聞こえる。すぐに近所の人々の手による救出作業が始まったが、結局近所で百人もの人々が建物の下敷きとなって亡くなった……。

「一瞬の地震のために五千三百人余の尊い生命が奪われた。涙を禁じ得ない。心からご冥福を祈ります。また、けがをなさった方、家族肉親を失った方、家を失い、財産を失った方々、心から御同情を申し上げます。今なお不自由な避難所生活を送っていらっしゃる方々にも慰める言葉もございません。将来の不安に悶々として夜も寝られぬ人々のことを思うと、身を切られるような辛さを覚えます。勇気を出して力を合わせて立ち上がっていかれることを心から念じます」。震災から一カ月、今の心境を語った。

しかし地震直後から現在まで、岡田宮司は殆ど不眠不休の活動を強いられてきた。

近所の西宮市立若竹生活文化会館に約三百人が避難した。同会館の運営委員会会長は岡田宮司であり、避難所を代表して外部との折衝にあたらなければならない。辛い生活が続けば、避難民も次第にイライラが募ってくる。岡田宮司はさまざまな交渉、連絡に忙殺された。

自分が奉仕する神社・神明八幡宮（西宮市神明町）も全壊した。「戦争で焼けた時も、鳥居と玉垣だけは残った。今回は全て倒壊し、見るも哀れな姿と化してしまいました。戦争よりひどい」と惨状を語る。

ただ「こうして生き残ったのは、神様が神社の復興をもう一度やれといっていることだと思う」と、戦後本建築復興第一号として神社本庁に表彰された手腕、覇気は健在である。

しかし「県下の各神社も相当な損傷を蒙っています。特に淡路、神戸など阪神に鎮座する神社は全部甚大な被害を蒙っています。亡くなった神職の方もおられます」と、庁長として、県下の神社の悲惨さには心を碎かれる毎日だ。

こんな時なにより励みになるのが神社界からの支援である。支援に対する感謝の気持ちを以下の通り表明、復興への決意を語った。

「神社本庁、伊勢の神宮、各地の神社界の方々、院館（国学院、皇学館）大学関係者その他の方々から、県神社庁並びに被害神社に対して御見舞い並びに御支援金も賜わり、身にしみて有り難く、心から感謝申し上げます。我々神社人は、この災禍にひるむことなく勇気と信念を奮い起こして復興へ向かって最大の努力を傾けるべきであると思います。前途には幾多の困難が待ち受けていまいしょうが、絶ゆまざる努力を積み重ねて復興すべきだと覚悟を新たにしています」

【写真は省略】